

平成31年度

# 札幌日本大学中学校

## 入学選抜試験

【1月9日】

国 語

試験時間 60分

1. 指示があるまで、問題冊子さっしを開いてはいけません。
2. 答えは、解答用紙に記入してください。問題は、～まであります。
3. 試験監督かんとくの先生の指示に従って、試験を開始してください。
4. 試験の途中で、トイレに行きたくなったり、気分が悪くなったりした場合は、手をあげて試験監督の先生の指示を受けてください。
5. 試験開始の指示があってから、解答用紙に「受験番号」「氏名」を記入してください。
6. 解答用紙には、解答以外を記入しないでください。
7. 試験が早く終わっても、周囲を見回したり、横を向いたりしてはいけません。試験監督の先生から注意を受けることがあります。
8. 机の上には、筆記用具以外は置いてはいけません。風邪かぜなどにより、ティッシュペーパーを使用したい場合は、予め試験監督の先生あらかじに申し出てください。



一  
次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

(本文は一部表記を変えたところがあります。)

自宅の最寄りの駅から地下鉄に乗り込むと、電車の座席は微妙な空き具合であった。

寒い時期ということもあり、着膨れた乗客がみんな左右に余裕を取って座っている。結果、混んではないが、座るには勇気のいる車両になっていた。やむを得ず、ドアの脇で立ちん坊を決め込んだ。帰宅で混み合う時間帯には、まだまだ早い午後2時頃のことである。

ふと目の先に、ランドセルを背負ったまま本に夢中になって座っている小さな小学生がいるのに気が付いた。背格好からして、まだまだ低学年だということが分かった。絵本ではなく、字のやや多い本を読んでいるように見えたので、小学校の二年生くらいであろうか。半ズボン姿のその小さな男の子は、自分が座っている席の左側に、紺色の上履き袋や工作で作ったような紙の箱を投げ出している。本に熱中するあまり、<sup>(A)</sup>お店を広げていることも忘れていたのである。

私は、その子の前に立った。すると目の前に立たれたことに気が付いたその子は、私の方をじっと見上げた。そしてめんどうくさそうに荷物を自分の膝の上に<sup>(B)</sup>おもむろに置いた。

『電車の中で、他のお客さんの迷惑になるようなことは駄目だよ』

そんな目だけの会話が、どうやら通じたようだった。私が腰掛けると、<sup>①</sup>その小学生は、もうすでに本に戻っていた。一心不乱に図書館のシールが貼ってあるハードカバーに顔を埋めていた。他の乗客のほとんどがスマートフォンに指を置き、小刻みに滑らせているのに対して、なぜか、その姿は好感が持てた。荷物を投げ出すような公共マナーに反した行為を差し引いても、<sup>②</sup>おつりが来るほどだったのである。

何を読んでいるのだろうと好奇心がむくむくと湧いたが、残念ながら角度的に表紙のタイトルを読むのは無理であった。その熱中度から、探偵ものとかではないかと推測した。私はタイトルの探索は諦め、自分の手帳を鞆から取りだし、その日のそれからの予定を確認することにした。

2、3駅が過ぎ、手帳をしまつて隣を見ると、相変わらずその半ズボンは本をにらめつけるように読んでいる。そして

時折、ページをめくり、しばらくすると、また次のページめくっていた。その様子を見るともなくぼんやり見ていると、ある瞬間、あるページのある行で目が止まったように思えた。それまでゆっくりと顔を回転させ行を追っていたのが、ぴたりと動かなくなったのである。当然ページめくりの手も動かない。じっと同じ行を読み返しているように思えた。

すると突然、今度は、ページを今まで読んできた方に向かって、勢いよく逆にめくりだしたのである。一体何が起こったのだ。逆に戻りながら、時々、手を止め拾い読みしたかと思うと、また勢いよくめくりだす。何かを探している、何かを探しているのだ、私にはそう思えた。そして遂に、ある箇所を探り当てると、じいっと読み出した。緊迫が隣の私にも伝わってきた。そして、それまで何も発していなかったその小学生が一言つぶやいた。

「たしかに……」

④ 私は、吹き出しそうになった。

何が「たしかに」なんだよ!? 何を納得したんだよ、君は!? そこまで入り込んでるわけ!?

想像するに、最初にびたつと止まったページには、彼が驚くような出来事が書いてあったのであろう。例えば、物語の主人公が、見事な推理をしてある問題を解決した、とか。そして、その小学生は、その推理の元となった\*叙述を再確認するために、数十ページ前まで慌てて遡ったのである。そして、あらためて読み直すと、そこにはある事実が隠れていたのを発見したのだった。そこで思わず、彼の口から、「たしかに……」。

そして私は、この小さな小学生に、およそ似つかわしくない「たしかに」という言葉遣いに思わず吹き出しそうになった……。

私は、ますます、その本のタイトルを知りたくなかった。大人気ないが、私もその本を読んで、その箇所で「たしかに……」ってなりたくなかったのである。

急に、その子が立ち上がった。降りる駅が来たのである。私の目は必死に、閉じつつあるその本を追い続けた。ここで逃すとそのチャンスは永遠にない。一瞬、タイトルの一部が見えた。かろうじて一部が見えたのである。そこには『ドリトル先生なんかかんとか』と書かれていたのだった。

数日後、私は事務所の近くの図書館の児童文学の棚の前<sup>たな</sup>にいた。もちろん、あの小学生の持っていた本を見つけに来たのである。あの小学生のように「たしかに……」ってなりたくて来たのである。でも、困ってしまった。『ドリトル先生なんかかかんとか』は12冊もあったのである。

試しにその中から『ドリトル先生月から帰る』というタイトルを手にした。しかし、目次を見ただけでは、この本のどこで手がびたつと止まり、どこであの「たしかに……」が生まれるのか、皆目<sup>かいもく</sup>見当がつかない。『ドリトル先生と秘密の湖』という「たしかに……」が生まれそうなタイトルも開けてみた。しかし、拾い読みでは分かりようがなかった。私は全12巻を前に途方<sup>とほう</sup>に暮れた。「たしかに……」は「朝」夕では手に入りそうもないのである。やはり、最初の1行から紐解<sup>ひもと</sup>かないと無理なのであろうか。紐を必死で手繰<sup>たぐ</sup>るように読み進んだあかつきの、あの『たしかに……』なのであろう。

そして、その「たしかに……」という境地が安直に得られないということが分かった私は、同時に、自分の中に、ある感情が横たわっていたことに気付いてしまった。いや、薄々<sup>うすうす</sup>感じてはいたのだが、正直言うと、気付きたくはなかったのかもしれない。そして、この「たしかに……」さえ手に入れば、それは知らなかったものとして済ませられるのではないかという妙な期待もあつた。

では、その知りたくなかったという感情とはどういうものであろうか。

私は、ドリトル先生の本が特定できなかった時、まず、自分の態度に「たしかに……」を\*享受する資格がないことを思い知らされた。それは熱中の\*賜であつたのである。それだけを見つけて楽しもうなんて、虫<sup>①</sup>のいい話である。そしてその時、私は、あの小学生に軽い嫉妬<sup>しつと</sup>のようなものを覚えていたのにも気付いたのであつた。嫉妬と言<sup>い</sup>言葉が激しすぎるとしたら、羨ましい<sup>うらや</sup>気持ちと言<sup>い</sup>てもいいかもしれない。では、その羨ましさとは何か。そして、それはどこから来ているのか。

私は、あの日、地下鉄に乗った時、いつものように移動時間を有効に使うと、座るやいなや手帳を開いて今日の予定を確認した。そこには、いつものように出席すべき会議が列挙されていた。その確認作業が終われば、コンピュータを開いて、来ているメールを確かめるつもりであつた。返事を求めるメールがたくさん来ているはずだ。そして、一本でも出せば、義務は減る。私は忙しい、私の時間は埋め尽くされている。そんな時、聞こえてきたのだつた、あの言葉が。「たしかに……」

人間にとって、時間は自由にならない。時間は誰だれに対しても平等に過ぎていく。だからこそ、時間を無駄むだにせず、有効に使わなくてはならない。私が電車での移動時間に手帳を開いたのも、コンピュータを開こうとしていたのも、そのためである。しかし、その時、隣に熱中がいたのである。その小さな熱中は流れゆく時間も存在している空間もなく、ただただ熱中していた。⑤ 時間は誰に対しても平等に過ぎてはいなかったのである。私は、その小学生に羨ましさを感じてしまった。その羨ましさとはどこに向かったものだったのか。

小学生がふんだんに持っている時間に対してか、それともあの熱中の仕方にか。

答えは分かっている。しかも、その気持ちが、あの電車で半ズボン姿の小学生の隣に座った時から始まっていたことも分かっているのである。

(『ベスト・エッセイ2016』佐藤雅彦「たしかに……」より 発行 光村図書出版)

\* 有楽町線 …… 東京都内の地下鉄の路線の一つ。

\* 叙述 …… 物事の事情や考えなどを順序立てて述べたもの。

\* 享受 …… そのものの持つ良さを味わったり、受け入れたりして、自分の精神生活を豊かにすること。

\* 賜 …… 結果として生じた良い事から。

問一 〽線(A)〽(D)の語句の本文中での意味として、最も適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

(A) お店を広げている

ア 周りが見えていない      イ あやまちに気付いていない      ウ 空間をひとりじめしている

エ 荷物を手に持っていない      オ 作品の世界にひたっている

(B) おもむろに

ア いきなり      イ わざとらしく      ウ もったいぶって

エ ゆっくりと      オ 諦めた様子で

(C) 一朝一夕いちよういつせき

ア 浅くとぼしい経験

イ いいかげんなやり方

ウ ありふれた日常生活

エ 手ぎわや要領の良さ

オ わずかな時間や日数

(D) 虫のいい

ア ずうずうしい

イ よそよそしい

ウ そらぞらしい

エ にながしい

オ ふてぶてしい

問二 —— 線①「その小学生」とありますが、この人物はたとえによって別の言葉で表されています。その言葉を二つ探し、  
五字以内、三字以内で、それぞれぬき出して答えなさい。

問三 —— 線②「おつりが来るほどだったのである」とありますが、これはどういうことですか。最も適当なものを次の中  
から選び、記号で答えなさい。

ア その小学生が、「私」を見てめんどくさそうに荷物を膝の上に置いた様子にはがっかりしたが、スマートフォンよりも読書に熱中しているという点に、周りに流されない意志の強さを感じたということ。

イ その小学生が、ひたすら読書をしていた様子は賞賛に値するものであったが、目の前に立っている乗客もいる電車内での行動としては判断力に欠けていたという点に、失望を感じたということ。

ウ その小学生が、他の乗客の迷惑を考えず読書にふけていた様子には腹立たしさを覚えたが、「私」からの注意を素直に受け入れて荷物を膝の上に置いたという点に、心なごむものを感じたということ。

エ その小学生が、公共の場で自分の荷物を広げていた様子は、小学生とはいえ好ましく思えなかったが、他の乗客とちがって読書に打ち込んでいたという点に、心ひかれるものを感じたということ。

オ その小学生が、電車の中でも周囲を気にすることなく読書に集中していた様子は、高く評価できるものであったが、逆に周りがまったく見えていないという点に、視野のせまさを感じたということ。

問四 — 線③「何かを探している、何かを探しているのだ」とありますが、このくり返しが表現していることは何ですか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 自分では認めたくないが、認めざるを得ないため、そう言い聞かせている「私」の様子を表現している。
- イ 最初はそうかとあいまいに推測した思いが、次第に確信へと変わっていく「私」の様子を表現している。
- ウ 本当にそうだと言えるのか疑問は残るが、そう思うしかないと諦めていく「私」の様子を表現している。
- エ 小学生の行動の真意が理解できたことで、心がすっきりと晴れわたっていく「私」の様子を表現している。
- オ 小学生と同じ気持ちになりながら、その何かをどうしても知りたがっている「私」の様子を表現している。

問五 — 線④「私は、吹き出しそうになった」とありますが、なぜ吹き出しそうになったのですか。六十字以内で答えなさい。ただし、句読点や符号も字数にふくみます。

問六 — 線⑤「時間は誰に対しても平等に過ぎてはいなかったのである」とありますが「私」は何に対してそう感じたのですか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 「私」が早く仕事を終わらせて、残った時間を自由に楽しもうと考えていた時に、その小学生は時間をまったく気にすることなく、自分の思いのままに過ごしていたこと。

イ 「私」が少しの時間も無駄にせず有効に使おうと、電車の中でもできる仕事を見つけてこなしていた時に、その小学生は時間も忘れるほど自分の好きなことに夢中になっていったこと。

ウ 「私」には仕事以外に残された時間が限られており、その時間もあわただしく過ぎ去っていくが、その小学生には多くの時間があり、そこに大きなゆとりが生まれていたこと。





エ 「私」には社会的な立場や責任があり、時間も仕事のさまたげとならないように使っていたが、その小学生には何の制約もなく、自分のためだけに時間を使うことができたこと。

オ 「私」がどんなに時間を有効に使おうと思っても、仕事に追われうまく使いこなせなかった時に、その小学生は電車の中での短い時間もおしんで、読書に熱中していたこと。



問七 ー線「気付きたくはなかったのかもしれない」とありますが、「私」はなぜ気付きたくはなかったのですか。八十字以内で答えなさい。ただし、句読点や符号も字数にふくみます。

日本の女性の現状について、次の会話文と資料1・2を参考に、後の問いに答えなさい。

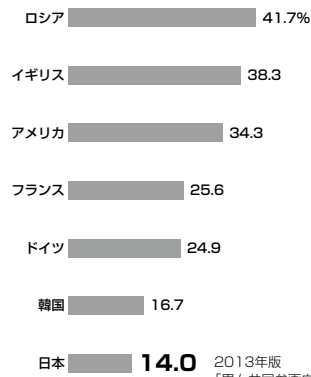
|   |   |   |   |
|---|---|---|---|
| <br>吉田さん | <br>湯川さん | <br>藤原君 | <br>湯川さん |
| 私(わたし)は理科が大好きなので、将来は大学で生物の勉強(けんぎょう)をして、できれば研究者になりたいわ。                                     |   |   |   |
| リケジョ(理系女子)だね。もう進路(しんろ)を考えているなんて偉(えい)いなあ。  |   |   |   |
| ① 日本(にっぽん)の女性研究者(じょせいけんぎゅうしゃ)は、<br>② クオータ制(くわおたせい)などの制度(せいど)を取り入(い)れている国(くに)もあるのよ。        |   |   |   |

問一 ①「日本の女性研究者は少ない」とありますが、日本の女性研究者の割合(わけあい)について、資料1を参考に、具体的に説明(せつめい)しなさい。

問二 ②「クオータ制」とはどのような制度か、(A)会話文を参考に説明(せつめい)しなさい。また、(B)日本の国会議員(こくわいぎん)にクオータ制(せいど)を導入(だうにゅう)すべきだと思うか、資料2も参考に、あなたの意見(いけん)を書き(か)きなさい。

資料1

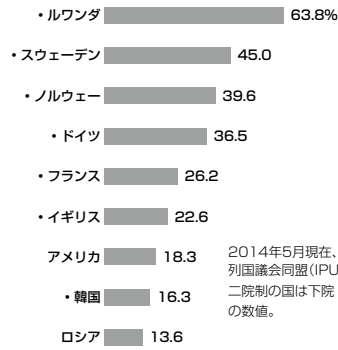
女性研究者(じょせいけんぎゅうしゃ)の割合



2013年版「男女共同参画白書」から(2014年7月9日掲載)

資料2






女性国会議員(じょせいこくわいぎん)の割合



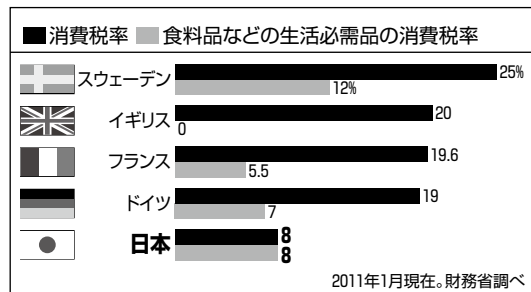
2014年5月現在、列国議会同盟(IPU)調べ。二院制(にえんせい)の国は下院(げえん)(衆院)の数値。

・はクオータ制を導入している国(2014年7月9日掲載図表を改定)

食料品の値上げについて、次の会話と資料1・2を参考に、後の問いに答えなさい。

|   |   |   |   |   |
|---|---|---|---|---|
| <br>本木先生 | <br>吉田さん | <br>本木先生 | <br>藤原君 | <br>湯川さん |
| <p>食料品などの生活に欠かせないものが値上げされると、収入の低い世帯ほど負担が大きくなる。生活必需品の消費税を軽くしている国も多いんだよ。</p>                |   | <p>それは「円安」の影響が大きいわね。日本は多くの食料を外国からの輸入に頼っている。円安になると輸入する材料の値段が上がるので、食料品を値上げせざるを得ないんだ。</p>    |   | <p>消費税も2014年4月から8%に増税されたから、家計には厳しい状況が続くわ。</p>   |
|   |   | <p>僕の大好きなアイスも10円上がっていたよ。</p>  |   | <p>お母さんが最近、コーヒーやパスタなどの食料品の値段が上がって大変だといっていたわ。</p>  |

資料1 各国の消費税の比較



資料2 同じ食べ物でも消費税が違

|  |                                       |                          |
|--|---------------------------------------|--------------------------|
| <p><b>ドイツ</b></p> <p>19.0%</p> <p>店内で食べるハンバーガー</p> | <p><b>7.0%</b></p> <p>持ち帰るハンバーガー</p>  | 家で食べる場合は生活必需品と見なされる      |
| <p><b>カナダ</b></p> <p>5.0%</p> <p>ドーナツを5個以下買う場合</p> | <p><b>0%</b></p> <p>ドーナツを6個以上買う場合</p> | 5個以下は外食扱いとなり、ぜいたく品と見なされる |

問一 線「家計には厳しい状況が続く」とありますが、その理由を、会話文を参考に2点答えなさい。

問二 資料1は、各国の消費税を示したグラフです。各国に共通する特徴を、日本の税率と比較して2点答えなさい。

問三 同じ食べ物でも消費税が違

